

5年目の壁を乗り越えて

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
塩谷 弘康 氏

福島大学 うつくしまふくしま未来支援センター
副センター長 行政政策学類教授



東 日本大震災・原発事故の発生以来、福島大学の教員の多くが、FUREをはじめとして、学類、グループ、個人などさまざまな形で復興支援に携わってきました。今回は、筆者が同僚たちと進めてきた「かーちゃんの力・プロジェクト（通称：かープロ）」をご紹介します。福島が直面する課題の一端をお伝えしたいと思います。

ここでいう「かーちゃん」とは、福島県の中通り地方と浜通り地方の間に位置する、阿武隈地域の女性農業者のことです。1990年代後半から、彼女たちは、風土に根差した漬物やみそなどの農産加工品をつくり、それを地元の直売所で販売したり、農家レストランや農家民泊・農家民宿などで提供したりしてきました。そして、この小さなコミュニティビジネスは、女性の自立を支えるとともに、農山村の地域づくりにも大きく貢献してきました。

しかし、原発事故によって、かーちゃんたちは、農地も加工施設も直売所も捨てて、県内外での避難生活を余儀なくされることになりました。そこで、飯館村、浪江町、葛尾村などから避難してきたかーちゃんたちと福島大学の教員がタッグを組み、彼女たちの加工の知恵と技術を活かして、自身と地域の復興を実現することを目的に、2011年10月、「かープロ」を立ち上げました。以来、企業や民間支援団体からの寄附金、国・県の助成金や補助金をいただき、全国各地の支援者や避難先住民のご協力も得ながら、農作物の生産・加工・販売を復活させ、安全・安心な食の提供、仮設住宅避難者の支援、伝統的な食文化の継承、県外からの視察者の受け入れ、福島からの情報発信など、さまざまな活動を展開してきました（詳しくは、塩谷弘康・岩崎由美子『食と農でつなぐ福島から』岩波新書をご覧ください）。

その結果、かープロは、避難者自身による避難者支援の取り組みとして大きな注目を集め、昨年9月には、「福島県農業賞（農村女性活動の部）」を受賞することができました。しかし、かープロはいま大きな曲がり角に立っています。各種の助成金や補助金が打ち切られ、雇用や活動を大幅に縮小せざるを得なくなりました。また、避難指示解除の時期が近づき、故郷へ帰還する者と避難先にとどまる者などに分かれ、かーちゃんたちが集まって一緒に活動することが困難になってきました。

このような状況は、かープロだけに起きていることではありません。被災地では、震災をきっかけに誕生した数多くの活動が「5年目の壁」に直面しています。プロジェクトの一当事者として痛感するのは、被災地では時間の経過とともに新たな課題が次々と生まれてくるということです。風化と忘却が進み被災地への関心は次第に薄れつつありますが、被災者一人ひとりが、自らの尊厳と誇りを取り戻すには至っていません。

福島の復興・再生には、被災者・被災地の自助努力だけではなく、共助と公助が不可欠です。筆者としては、FUREの活動を通じて、これからも被災地の現状と被災者の生の声をお届けし、多様で持続的な「つながり」を生み出すお手伝いをしたいと思っています。



かーちゃんの手作り弁当を試食してもらいながら、仮設住宅の避難者からお話を伺う福島大学の学生たち

※このコーナーは、福島の被災者と被災地域の復興・復興を科学的・学術的見地に基づき支援している福島大学「うつくしまふくしま未来支援センター（FURE）」のスタッフによる寄稿です。
科学的データを基にした福島県の産業や環境の現状、FUREの取り組み、直面している課題などを、約20回にわたり連載し、より正確な福島県情報をお届けします。